

# 学校の七不思議調査報告

## 理系脳

我々、学校の七不思議調査委員会は平成を二十と

余年過ぎた今、大正、昭和から語り継がれし学校の七不思議がどのように変わったのかを調査する使命を帯びていた。

その調査の結果よりも、まずは我校の予備知識なき諸君に七つの席を埋めている怪談話の紹介から始めたい。

夜な夜な動き出す人体模型、満月の晩に一段増える階段という非常にオーソドックスな二つをはじめ、夜な夜な調子外れな音楽を奏でる鉄琴、不意を突くと映すのが遅れてしまう姿見、夏へと繋がる開かずの扉、どこから見ても目をそらすシャイな肖像画、トイレの花子さんを退け、七つの席を奪つた

学内移動自動販売機という七つ。  
私の調査担当だった増える階段の結果は最後に記すとして、他の六つの調査結果を簡単ではあるが列挙したい。

夜な夜な動き出す人体模型は後輩である夜な夜な動き出すガイコツと共に故マイケル・ジャクソン氏ばりのダンス技術を身につけ夜な夜な学生諸君を楽しませているらしく、人体模型のマイケル君と呼ばれ親しまれている。現在ではファンクラブまで設立されているという。

調子外れな音楽を奏でる鉄琴は聞いた者全員に爆笑された悔しさをバネに人知れず練習を続け、現在では夜な夜に行われるコンサートが満員御礼、チ

ケットは二ヶ月先まで売り切れという事態になっている。

不意を突くと映すのが遅れてしまう姿見は何十人の学生に不意を突かれたことに立腹し、もう何も映すまいと一晩のうちに曇りガラスになってしまった。しかしながら、噂では気が向いたときには姿見に戻つて女学生の姿を映しているらしい。

夏へと繋がる開かずの扉を無理やり開けた調査員が言うには、扉の先の夏はひどい猛暑で二度と行きたくはないという。彼は地球温暖化の影響がこんなところまできてしまったことを嘆いていた。

シャイな自画像と目を合わせようとした調査員達は四方八方から視線を送ったのだが、自画像は恥ずかしさのあまり泣き出してしまい、美術室の床一面が青色の油絵具に塗りつぶされてしまった。以来、誰も自画像とは目を合わそうとせず、肖像画はどことなく寂しそうな顔をしている。

学内移動自動販売機はいつの間にかマズジュー専門の自販機となつていて、学生達の間では大人気だが、その人気さ故によく売り切れになつていている。

そして、よく移動するためになかなか補充ができず、作業服を着た兄ちゃん達の困っている姿がよく目撃されている。

そして、私の調査物件だった増える階段だが、調査に向かつた私が目にしたのは、平成の大改築によつてエスカレーターとなつてしまつた階段の姿だつた。

エスカレーターとなつてしまつたくらいでめぐる私ではなく、持ち前の理系思考でもつて調査を続けた。まずは平日にエスカレーターへ行き、二十枚の写真を撮つた。そして、満月の夜にもう一度エスカレーターへ行き、二十枚の写真を撮つた。これらの写真の結果から、平日には平均して 12.67 段あり、満月の夜には 13.72 段あつた。四捨五入すれば一段の差があるが、この結果が統計学的にみて有意な差であるのかどうか統計学に疎い私には判断できない。

さらには、エスカレーターをのぼるスピードを遅い、普通、走る、の三段階に替え、十回ずつのぼつ

逍遙幻草道  
て段数を数えた。その結果では、遅い場合には一段から三段の差があり、普通の場合では一段、走った場合には差がなかつた。

これだけやつても分からなかつたのだが、ひょんなことから増える階段の謎が判明した。それは計四枚の写真からではなく、エスカレーターの様子を録画した動画からだつた。その動画を見るに、やや奇妙なことではあるが、満月の夜にだけ、エスカレーターがゆっくりと動いていた。つまりは、ゆっくりと動いていたせいで段数が増えたように感じられる、というのが増える階段の真実だった。

問題は何故、満月の夜にだけエスカレーターのスピードが遅くなるのか、ということであるが、これに関しては私の考えを記そうと思うが当然のようにこれは推測の域を出ない。理系脳の私は推測で物を言うのは好みないがそれでも記す。満月の夜にエスカレーターのスピードが遅くなる理由、それは満月の夜には件のエスカレーターの仕様を満たす電力が供給されていないことが原因である。これは現象論的に正しい。では、電力が不足している原因はあると予想される。

電気仕掛けの狼守衛は、『守衛のうち一人は融通の利かないロボットである』『満月の晩にはその守衛は守衛室にいない』という二つの噂が元になつており、さらに狼男の目撃者が現れ、現在の形になつた。つまり、守衛はロボットであり、かつ狼男である、ということは満月の晩には電力消費が激しく、エスカレーターが電力不足になつてしまふ、という予想。

たこ焼きバー黛イーは、どこぞの不可思議団体が満月の晩に何台ものたこ焼き器を持ち寄り、翼と鉤爪のあるタコを使ってたこ焼きバー黛イーを開いているという話で、そのたこ焼き器のせいでエスカレーターが電力不足になるという予想。

どちらの予想が正しいか、またはどちらの予想も正しくないということも往々にしてあり得る。その

結果は数年後の七不思議調査を待たねばならず、それは確かに残念であるが、よくよく考えてみれば私にとって時間というものは無意味であつた。

さて、末尾にはなつてしまつたが、この度の七不思議調査をもつて私こと『統計学に疎いホルマリン漬けの理系脳』は『無人演奏鉄琴』を退け、めでたく七不思議に昇格を果たした。しかしながら『無人演奏鉄琴』は近々『人体模型マイケル君』と一つの不思議になることが予想されるため、『自販機』VS『花子さん』のときのようなギスギスした事態にはならず、我々七不思議の関係は概ね良好である。

階段の実地調査および執筆の際に私の体となつてくれた人体模型マイケル君には心からお礼申し上げる。また、彼と鉄琴さんの末永き幸せを祈つて、今回の七不思議調査の結びとしたい。

